

26 【ところてん】

雲行きがあやしい夕刻、村のはずれまでお使いに行った時のことです。

雲行きがあやしいということは、おぼけがでる予感がするということと同じです。

やっぱり妙な生き物に遭遇しました。

丸い鏡餅くらいの大きさの、半透明の生き物で、のんびりと上下左右にゆれています。

道端の草むらの、小便小僧程度の湧き水のところに居ました。

蛙の卵に似ているけれども、そのかたまりのなかには何も居そうにない。

おもい切って触ってみると、とたんに二十、三十のかたまりにわかれる。

そのひとつに触ってみると、それも二十、三十の小さなかたまりにわかれる。

持って帰ろうとしたけれども、そのかたまりのゆれがいやいやをしている感じなので、やめました。

お使いがあるので、懐爺のところへは翌日、登校前に寄りました。

懐爺は眠っていました。

「とうみんなには、まだはやいぞい」

大声で呼びかけると、

「朝は、毎日が冬眠です」

と、目をこすりながらでてきました。

時間が少ないので、かいつまんで話しました。

「夏休みは終わりましたか」

知っているはずの懐爺がきくので、

「なつやすみは、おわったばかりじゃ」

と、ぼくは突っ慳貪（つつけんどん）に答えました。

「夏休みが終わったということは、夏も終わりですね」

懐爺は当たり前のことをいいました。

たぶん寝ぼけているのでしょう。

「はやくせい。わしはじかんがない」

ぼくが急かすと、懐爺は咳ばらいをひとつして、
「それは【ところてん】というおぼけですよ。季節はずれの【ところてん】。特技は分身の術です」

なるほど、あれが有名な、ぶんしんのじゅつだったのか。

「【ところてん】なら、くえるんか」

「くっても毒も薬にもなりませんよ」

「でも、うまそうじゃったのう」

「あんなもの美味そういうのは金ちゃんだけです。でも季節はずれの【ところてん】は煮ても焼いても酢をかけてもたべられない。無理してたべても、お腹の中で分身の術を使うからうるさくてしかたがない。たべ過ぎてお腹が爆発（ばくはつ）した人もいます」

懐爺は苦虫を噛みつぶした顔でいいました。

おそらくお腹が爆発する寸前まで食べた経験があるのでしょうか。

時間がなかったので、ぼくは最後にいいました。

「かいじいものう」

「わたしが何でしょう」

「ぶんしんのじゅつを、つかえばいいのにのう」

そしたらわざわざ祠に来なくても、いつでもどこでも会える。

懐爺は何となくうれしそうでした。